

太平洋の先駆者

—海と船にちなんで—



寺井久美

去る三月、英国の豪華客船クイーン・エリザベス二世号が横浜を訪れ、数万人の人々が波止場を埋めた。船や海には、何かロマンティックな、神秘的なふん囲気があって、人々をひきつけるようである。

私は、生後十ヵ月で乳母に抱かれて、ボンベイ經由ロンドンに航海して以来、横浜—神戸間はもとより、釜山、大連、上海、香港、スラバヤ、バリ島等へ、戦前活躍した浅間丸、照国丸、上海丸、日蘭丸等により船旅をする機会に恵まれた。少年時代のこのような経験によるものか、あるいは中学時代に熱読した大航海時代の航海記、中でもジエイムス・クック船長の太平洋航海記に魅せられたためか、いつのころからか、暇とお金ができたら南太平洋はポリネシアの島々をヨットでさまよってみたいと思うように

なった。

太平洋は約七千万平方マイルで、南北米大陸の四倍の広さがあり、この広大な海域にポリネシア、ミクロネシア、メラネシアの島々が点在している。多くの地図のポリネシア群島にはハワイ諸島が含まれていないが、ポリネシアグループは、北から南へ、ハワイ諸島、スボラデス諸島、フエニックス諸島、エリス環礁^{しよ}、サモア諸島、トンガ諸島、フィジー諸島、ケルマデス諸島、ニュージーランドと下り、中央部のマニヒキ諸島、マーケサス諸島から東へ、クック諸島、ソサエティ諸島、ツプアイ諸島、ファモト諸島、更に約一、四〇〇マイル離れてイースター諸島に至っている。そうしてミクロネシア群島とメラネシア群島がアジア大陸への二本のかけ橋として西方に伸びている。

これらの島々のポリネシヤ人が、いつごろ、どこから来たか、そしてどのようにしてこの広大な海域に展開したかは不明であるが、ニューギニヤからイースター島までは八千マイルの距離があり、ハワイとニュージールランドの住民が互いに往来していたことを思うと、程度の高い航海術を身につけ、かつ苦難に耐えることのできた海洋民族であったことに疑問の余地はない。

夏の夜の海辺の物語のつもりで、この偉大な海洋民族について、私の空想をご紹介したい。ミクロネシヤの人々にはマレー系の血がまじり、メラネシヤの人々にはバプアとの混血のあとがみられるが、ポリネシヤの人々は、色は黒くなく、ちぢれ毛でもない。体格、容貌は西歐人に近く、モンゴール系ではなくアーリヤ系の人種である。昔、印度を出発して陸路を西方に移したグループのほかに、海路を東へ移動したグループがあった。ポリネシヤ人にバラモン教の影響がないというところから、印度を出発したのはバラモン教が印度全域に普及する以前、紀元前、六世紀以前のことであった。フェニキア人が地中海沿岸、アゾレス群島、英国等に航海していたのが紀元前一、二〇〇年のころであり、北欧のヴァイキングが欧州沿岸を跳梁したのは、

八世紀から一〇世紀にかけてであった。ちょうどこの間の年代に彼らは大航海に出発したことになる。また、ヴァスコ・ダ・ガマがアフリカの南端を回って初めて印度に到着したのは、一四九八年のことであったから、これは航海術ということから考えると気の遠くなるほど昔のことであった。

彼らは印度を出発して、まず何処へ行ったのであろうか。ポリネシヤの語り伝えの中に、祖先のいた楽園としてハワイキ、ジャワイという名があるが、ジャワ島は古来豊かな土地であったことからみて、ジャワ島であり、印度を出発した彼らはジャワ島を通過したことは間違いないと思われる。ジャワ島にどの位いたかはわからないが、ここから島伝いにニューギニヤを経て、ルイジエイド珊瑚礁、ソロモン群島、サンタクルス諸島、ニューヘブライ諸島、ニューカレドニア諸島からフィジー諸島につながるメラネシヤ・ルートがあり、また、セレベス島、ヤップ島、カロリン諸島、マリアナ諸島、マーシャル諸島、ギルバード諸島からエリル環礁につながるミクロネシヤ・ルートがある。メラネシヤ・ルートにフィジー諸島、ミクロネシヤ・ルートはエリス環礁あるいはフェニックス諸島でポリネシヤ諸

島に連結され、ここから北はハワイ諸島、東はイースター諸島、南はニュージーランドまで数世紀をかけて展開して行った。このようなルートは二日乃至五日行程で大部分の島を結ぶことは可能であるが、存在不明の島々を、どのようにして発見していったかはなぞである。

マゼランが、一五一九年マゼラン海峡を抜けてからフィリピン群島の一角にたどり着くまで約三ヵ月、無数にある太平洋の島々の一つも発見できず、水と食糧の欠乏に悩まされ、苦しい航海をしたことを思うと、砂漠の住民が水を見つける才能を持っているように、この海洋民族は、陸地をかぎ出す特殊技能を身につけていたのであろう。

ジャワ島のポロブドールの仏教遺跡には、大型帆船がほられており、印度人が古来すぐれた造船技術をもっていたことを示しているが、ヒンズー教がジャワに伝来する以前にポリネシア人の先祖が通過しているの、彼らが大型の帆船を使用したとは考えられない。彼らを使用したのは、かつてニュージーランド、フィジー、ハワイ等に見られた大型の航洋カメラ（一本の木で造った丸木舟ではない）二隻を、双胴型船のように横木でつなぎ、その接合部の上に

女、子ども、食糧等を搭載したものであったろう。こうすればよほどの嵐でなければ転覆はしないし、またかなりの帆走力をもてたはずである。移動のためには、数年がかかりで準備が行われ、飲料水の補給を考えて出発は雨期に行われた。そして航海は一五乃至二〇隻が連携を保ちつつ、時には一団となり、時には広く展開して行われた。少なくとも一隻が島かげを発見すれば、全船がこれを知り得る方法がとられていた。

一七六九年、クック船長がタヒチ島からニュージーランドに航海するのに二ヵ月を要したが、これと同じルートをポリネシアの人々が航海している。帆走の速力を考慮すれば、星と太陽を頼りに三ヵ月乃至四ヵ月の航海に耐える知恵と体力があつたに違いない。タヒチには、一二世紀のころ、行方不明となりニュージーランドのマオリの英雄となつていた息子を、酋長しゅうちやうがさがしに行つたという伝説があり、さつまいも、タロイも、犬など、ニュージーランド土着のものでないものがあつて、かなりの往来があつたことが裏書きされている。

その後人口が増加して、それを解決するために新天地を求めて、島から島への移動が行われた。そして新しい島が

発見されるまでには、相当数の犠牲者を出したであろうことは想像に難くないが、既知の島々の間では、トンガ、サモアの住民がフィジーまで船用材を定期的に採集に行っていたように、かなり定期的に往来があり、仲間がどこにいるかを知っていた。航海のためには、小枝で作った海図が使用されたといわれている。

このようにして、太平洋の島々への展開が行われ、一六世紀から一八世紀にかけて、スペイン、ポルトガル、フランス、英国、オランダなどの冒険家が、これらの島々を発見するまで、この偉大な海洋民族は、そのすぐれた航海術と忍耐力をもって太平洋に君臨していた。

チリーの燐鉱石採集のための労働力として、アフリカの奴隷狩と同様に、イースター諸島の住民を南米に強制移動させ、当時六〇〇〇人からいた人口を二五〇人にしてしまったり、農園の労働力としてソロモン諸島の人々をフィジーやクインズランドにかりたてたような暴力行為は別としても、西欧人のもたらした酒、疫病、宗教等によってポリネシアの文化は破壊され、精神の荒廃もたらされた。生きる目標を失った島民の死亡率が急速に高まった例もあるが、

西欧人との接触によって、多くの後進民族がそうであったように、ポリネシアの人々は劣等感にとらわれた。西欧人は何でも彼らよりよくできる神さまであった。祖先伝来の業績、仕事などを顧みる気持ちをなくし、その美しい手織の布、彫刻、カヌーなどが見向きもされなくなつたばかりか、キリスト教の宣教によって語り伝えられた先祖の歴史に対する関心も失われていった。現在では、サモア、タヒチの人々やマオリ族の一部に伝わっている冒険談や歌節が、わずかに過去を知る糸口となつているにすぎず、太平洋の先駆者の歴史はなぞに包まれている。

(海上保安庁)

著者は、一九二二年生れ。父君（日本郵船勤務）の仕事の関係からここに見られるように、海や船に対する興味をもちつづけられ、現在の職につかれたのも、当然のような気がいたします。

(編集部)